

平成 28 年度 学校保健統計健康状態調査

調査結果の概要

- 中学 1 年生 (12 歳) の DMFT (一人当たりの永久歯のむし歯等数) は 0.53 本で、前年の 0.58 本から減少し、本年度も全国平均の 0.84 本を下回る好結果である。
- 今年度より、「四肢の状態」が健康診断の必須項目に加わり、「脊柱・胸郭・四肢の状態」の被患率が大きく増加している。
- 歯肉の状態において、中学校で全国平均を下回るという改善がみられたが、幼稚園・小学校・高等学校では全国平均を上回った。
- ぜん息の被患率は減少傾向、食物アレルギーを有する者の割合は年々増加傾向にある。
- 「裸眼視力 1.0 未満の者」の割合は、全校種において全国平均を下回っている。
- 肥満傾向児の出現率は、全国平均よりやや低い値にある。痩身傾向児の出現率は、男女ともに 12~14 から高く、特に男子の 14 歳が全国平均を大きく上回っている。

1 調査の目的

幼児、児童及び生徒 (以下「児童等」という) の発育及び健康状態を明らかにすることを目的とする。

学校保健安全法により 4 月 1 日から 6 月 30 日に実施される健康診断の結果に基づき、健康状態調査を実施する。

2 調査の対象

本調査の対象者は、文部科学省の学校保健統計に準ずるものとする。

〈発育状態調査〉

平成 28 年度学校保健統計調査 (文部科学省) 岐阜県調査実施校の抽出調査結果

〈健康状態調査〉

岐阜県公立小学校、中学校、高等学校及び幼稚園に在籍する満 5 歳から 17 歳までの児童等在学者全員を対象

校種	学校総数	在学者数	参加校数	対象者数	対象者率
	(校)	(人)	(校)	(人)	(%)
幼稚園 (5歳)	81	1,971	59	1,356	68.8
小学校	370	112,463	370	108,554	96.5
中学校	180	59,162	180	57,324	96.9
高等学校	66	45,447	65	39,944	87.9
総数	697	219,043	674	207,178	94.6

※ 学校数等は、平成 28 年度学校基本調査結果による。

※ 対象者率は調査対象者/在学者数とする。

3 調査項目

本調査の項目は、文部科学省の学校保健統計調査項目に準ずるものとする。本県独自の項目として「食物アレルギー」「1 型糖尿病」「2 型糖尿病」「腎性糖尿」「学校生活管理指導表 (アレルギー疾患用) の活用者数」を追加している。

4 結果と考察

(1) 発育状態

○身長・体重とも全国平均を下回る傾向

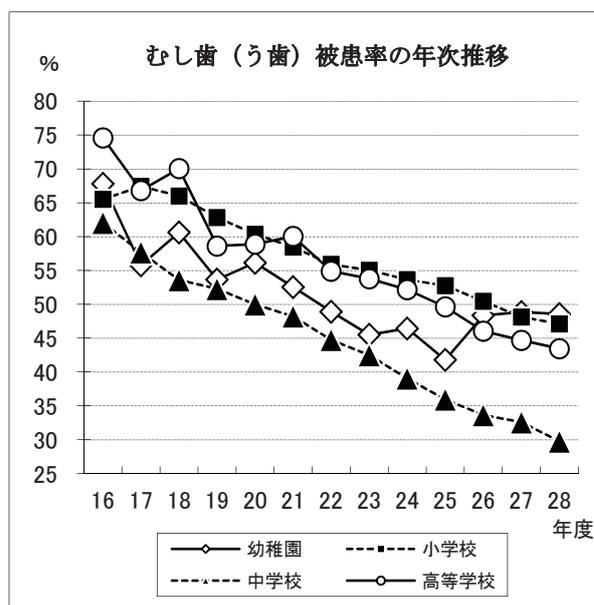
平成 28 年度の児童等の身長・体重について、身長は男子が 11 歳で、女子が 5 歳で全国平均を上回ったが、それ以外の年齢では全国平均と同じか下回った。体重は男子が全ての年齢で全国平均と同じか下回り、女子が 13 歳で全国平均を上回ったが、それ以外の年齢では全国平均と同じか下回った。

前年度と比較すると、身長では男子が 7・8・10~13・17 歳で、女子は 5・7・9・10・14 歳で前年度を上回った。体重では男子が 7・11・12 歳で、女子は 5・6・10・13~15 歳で前年度を上回った。

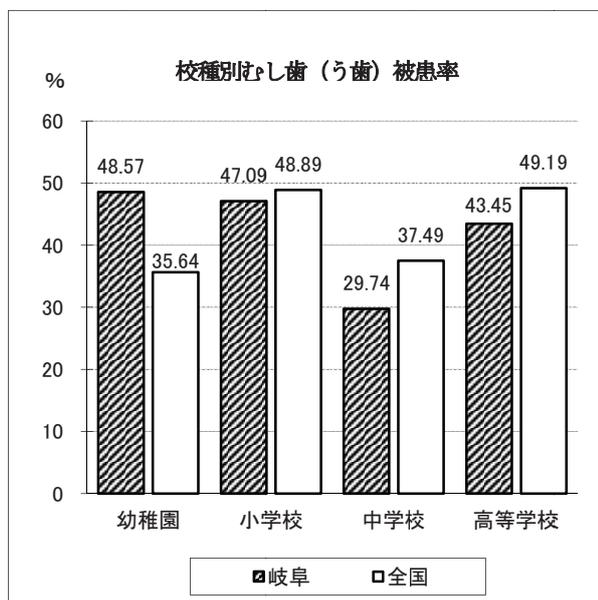
(学校保健統計調査速報 岐阜県 HP より)

(2) むし歯 (う歯)

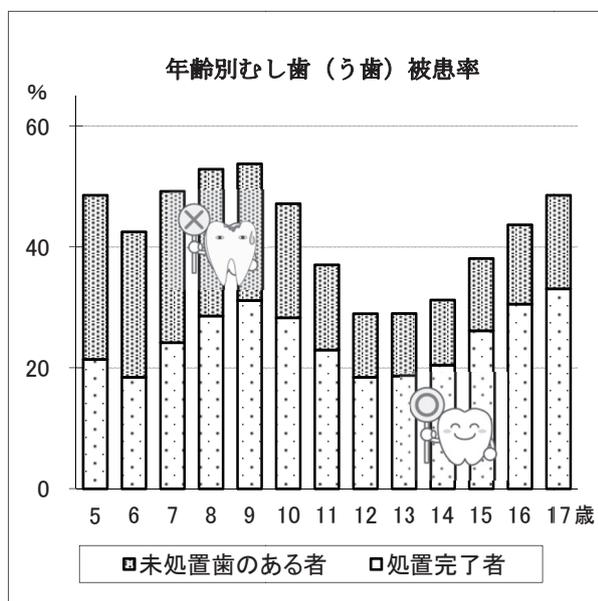
○むし歯は減少傾向



むし歯被患率は、前年度値の幼稚園 48.85%、小学校 48.13%、中学校で 32.58%、高等学校 44.68%と比較すると、全ての校種で少し減少する。校種別では、幼稚園が全国と比べ被患率が高い。



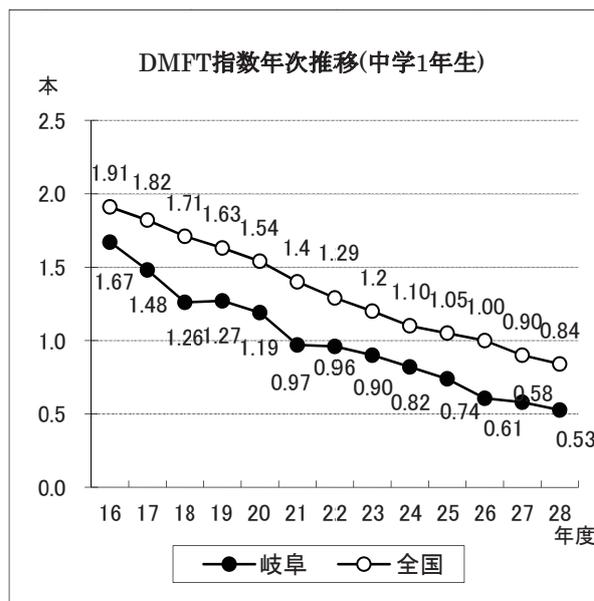
むし歯被患者の内、未処置歯のある者は、5歳で 27.15%と高く、その後は減少している。11歳から13歳において割合が減少するのは、乳歯が生え替わることによると考えられるので、14歳以降の永久歯のむし歯を増加させないように、幼少期からの生活習慣及び教育が重要である。



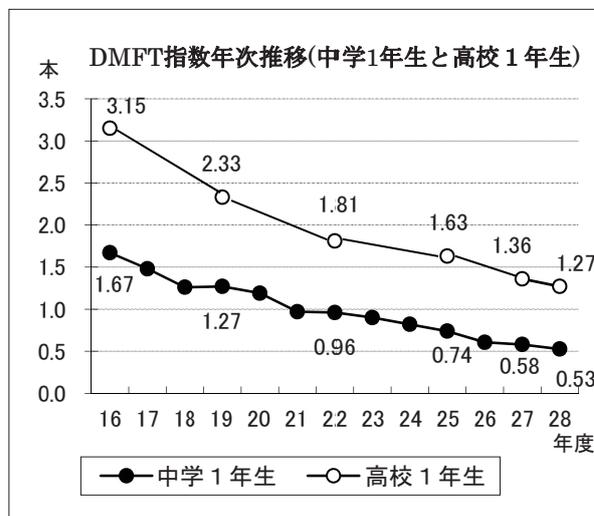
DMFT 指数 (永久歯の一人平均う歯経験歯数)

- D: 永久歯のむし歯で未処置の歯
- M: 永久歯のむし歯が原因で失った歯
- F: 永久歯のむし歯で処置を完了した歯

中学1年生 (12歳) の DMFT 指数は、昨年度の 0.58 本から本年度 0.53 本に減少している。



平成27年度より、高校1年生 (15歳) の DMFT 指数を新たに調査項目に加えた。平成12年度から、3年ごとに行っている歯・口の実態調査 (中1・高1) の結果と合わせると、下記のとおりである。高校1年生 (15歳) の DMFT 指数も年々減少している。

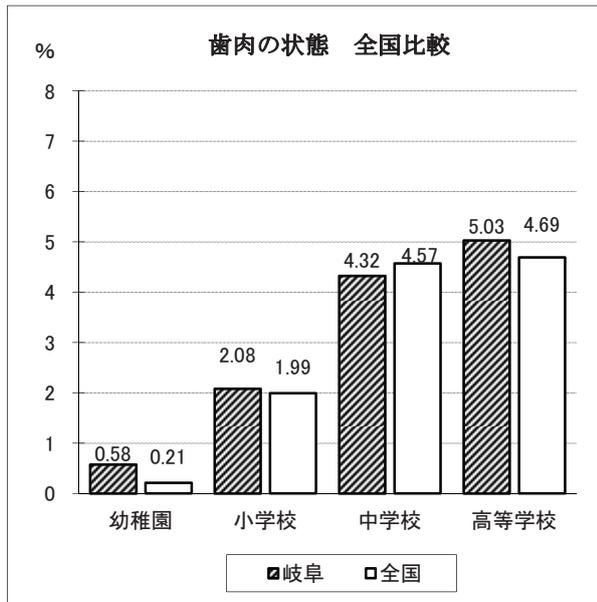


(3) 歯肉の状態

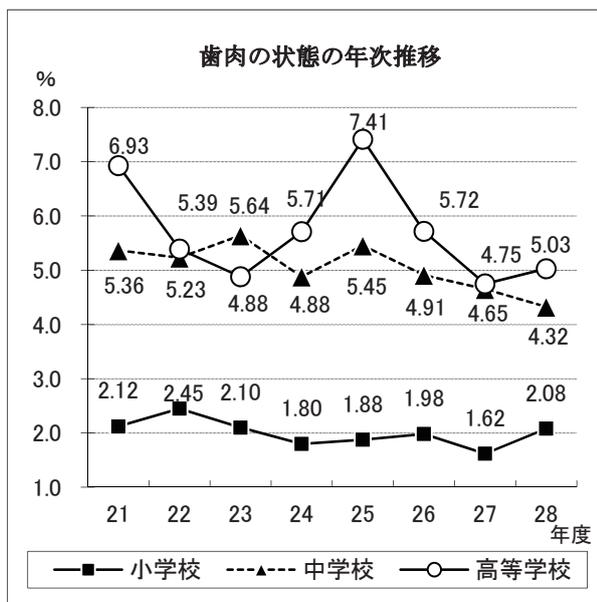
○歯肉の状態が中学校で良好傾向

歯肉の状態：歯肉に炎症があり、歯肉の状態が「2」(専門医による診断が必要)と判定された者

歯肉炎の生徒の割合は、全国と比較すると中学校において下回る結果となった。しかし、幼稚園、小学校、高等学校では昨年度から増加する結果となった。



歯肉の状態の年次推移は、平成 25 年度以降、中学校において、減少傾向が続いている。

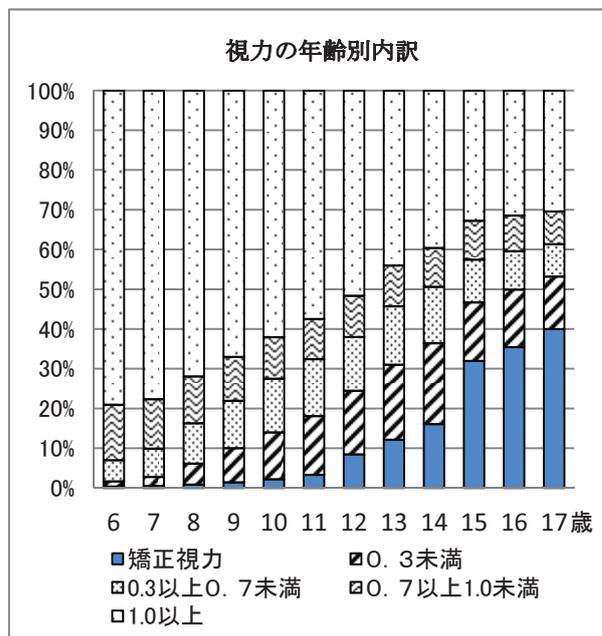


「歯肉の状態」の「1」は、GO と診断され、「歯肉に軽度の炎症症候が認められているが、歯石沈着は認められず、注意深いブラッシングを行うことによって炎症症候が消退するような歯肉の保有者をいう。」と定義される。定期健康診断の歯科検診では、学校歯科医と連携し、比較的軽度の歯肉炎であっても予防のため「2」（要受診）と判定している学校も多いことが被患率を上げている要因の一つではあるが、この数年、疾病ハイリスク・アプローチとして、GO CO のある児童等への個別指導を実践している学校が増えつつある。小学校から行われている歯科保健活動が、中学校の改善に繋がっていると考えられる。

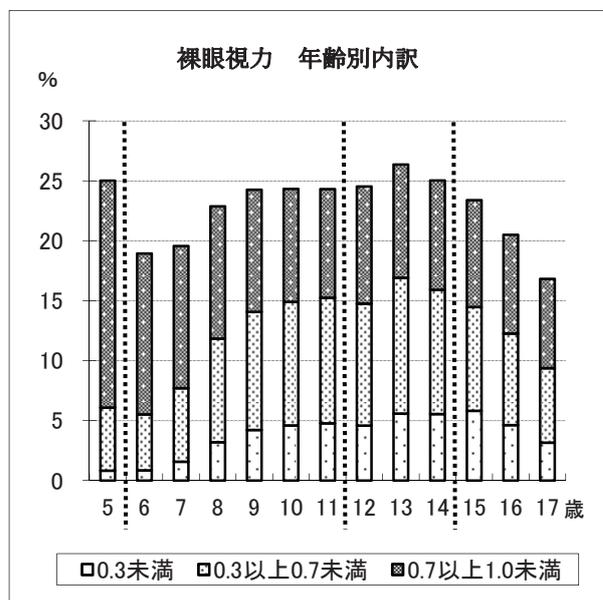
(4) 裸眼視力

○裸眼視力 1.0 未満者 全国より下回る

近年、コンタクトレンズの使用などにより裸眼視力を測定していない者が増加しているため、平成 27 年度より「眼鏡やコンタクトレンズで視力矯正をしているため裸眼視力を測定できず、矯正視力のみ測定した者」の数も調査し、それを含めた視力の割合を算出した。裸眼視力 1.0 未満の者の割合は、年齢が進むにつれて着実に増加していることがわかる。スマートフォンやパソコンなど、近くを見る機会が増え、長時間利用していることが視力低下の一因と考えられる。家庭と協力して子供の生活習慣を改善する取組、家庭内でのルールづくりや外遊びの奨励等が必要である。



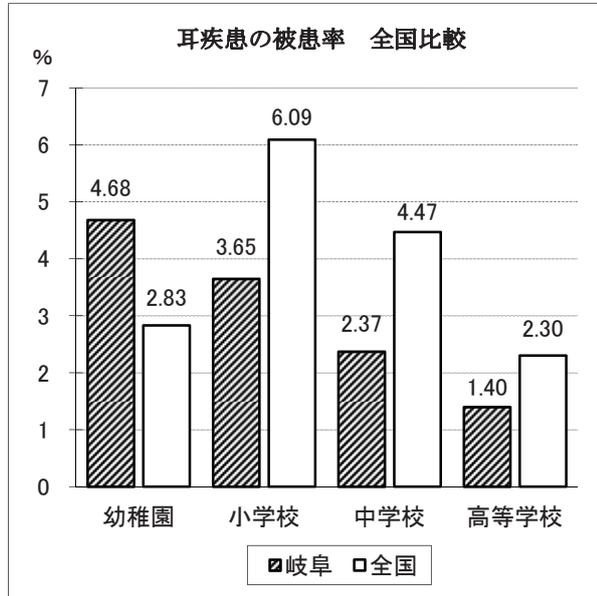
なお、弱視の早期発見、学校生活に支障がないための視力矯正指導に留意したい。



(5) 耳疾患・鼻・副鼻腔疾患

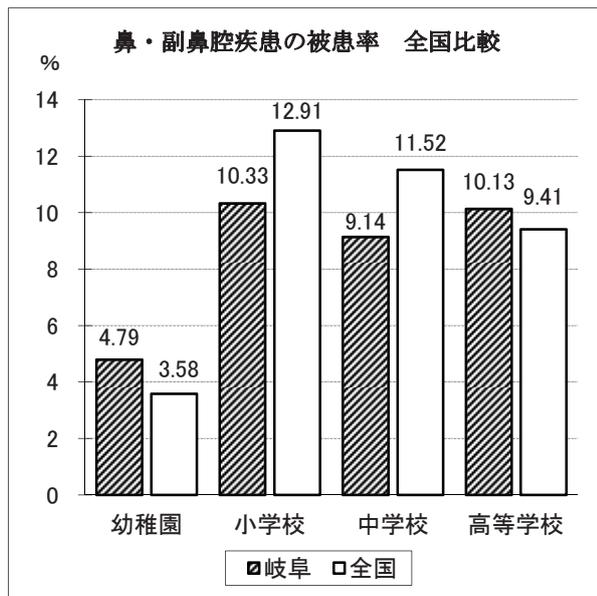
①耳疾患・・・急性・慢性中耳炎、内耳炎、外耳炎、メニエール病、耳垢栓塞等の疾患・異常と判定された者

耳疾患の被患率は、小学校、中学校、高等学校では全国平均を下回っている。一方、幼稚園では前年度の結果(2.48%)から大きく増加がみられた。



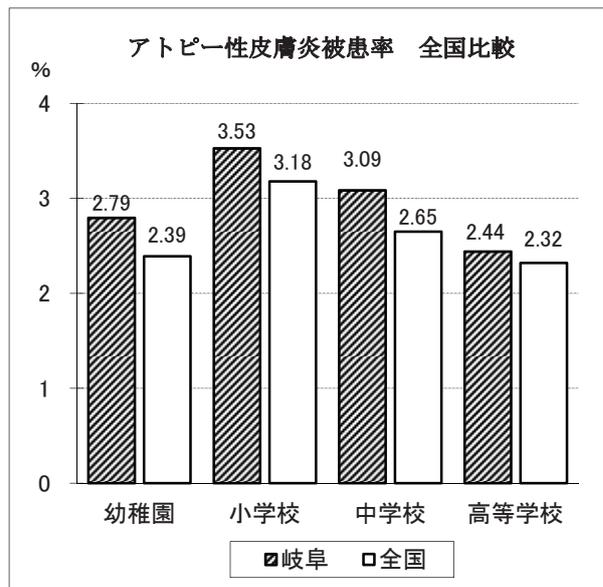
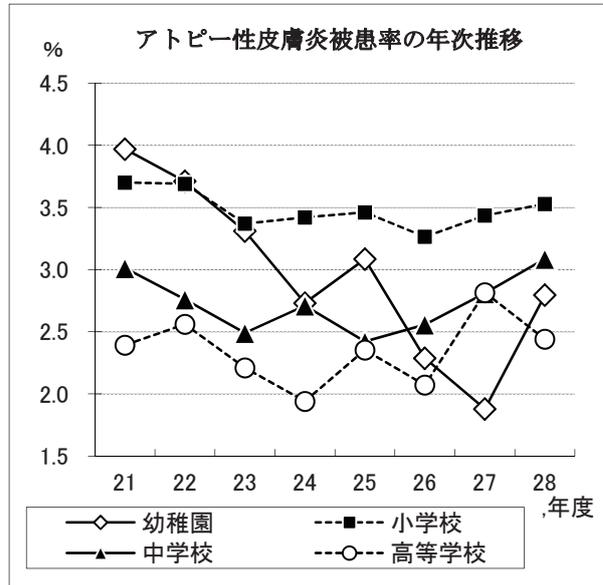
②鼻・副鼻腔疾患・・・慢性副鼻腔炎、慢性鼻炎、鼻ポリープ、鼻中隔彎曲、アレルギー性鼻炎の疾患・異常と判定された者

鼻・副鼻腔疾患については、高等学校において、昨年度の結果(15.26%)から大きく減少した。一方、幼稚園では全国平均を上回る結果となった。



(6) アトピー性皮膚炎

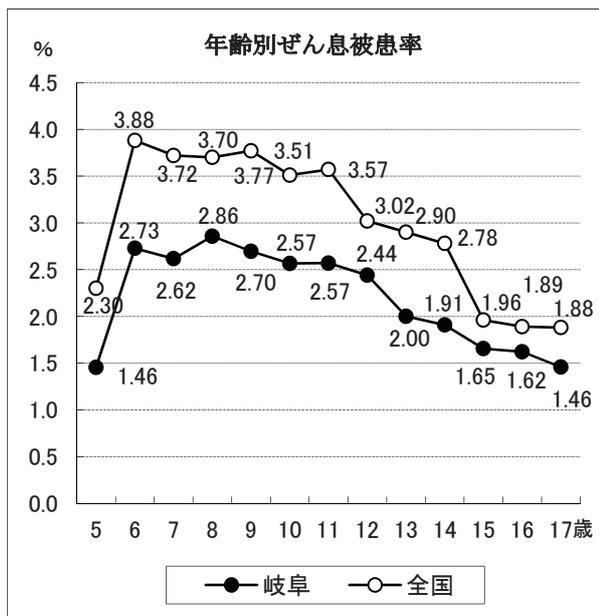
「アトピー性皮膚炎」の者の割合は、前年度結果の幼稚園 1.88%、小学校 3.43%、中学校 2.81%、高等学校 2.81%と比較すると、幼稚園、小学校・中学校で増加している。特に幼稚園の増加が著しい。



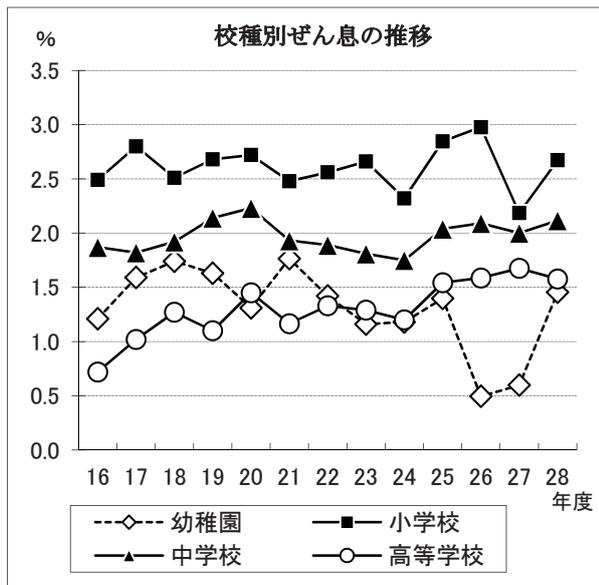
(7) ぜん息

○全国平均より低い傾向

昭和 42 年度以降、岐阜県では、全国平均に比べ、年齢別ぜん息被患率は全年齢で低い傾向は続いており、平成 28 年度は昨年度比 0.16 ポイントの減少が見られる。



校種別のぜん息の推移は、幼稚園、小学校、中学校で増加が見られる。幼稚園については、昨年度と比較すると大きな増加がみられるが、過去の推移からみると平均的な数値である。



(8) 食物アレルギー

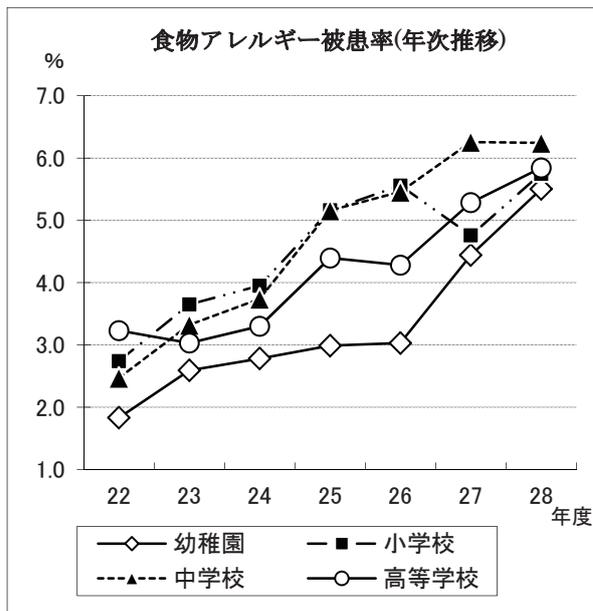
○食物アレルギー被患率は増加傾向

食物アレルギーの者：入学時または健康診断前の保健調査等で食物アレルギーと確認された者

食物アレルギーは、平成 21 年度から調査項目に加えている。食物アレルギーを有する児童等の被患率は、全体的に増加傾向にある。

平成 28 年度の食物アレルギーを有する児童等の被患率は、幼稚園 5.50%、小学校 5.75%、中学校 6.24%、高等学校 5.84%であり、幼稚園、小学校、

高等学校では、平成 21 年度以降、最も高くなっている。

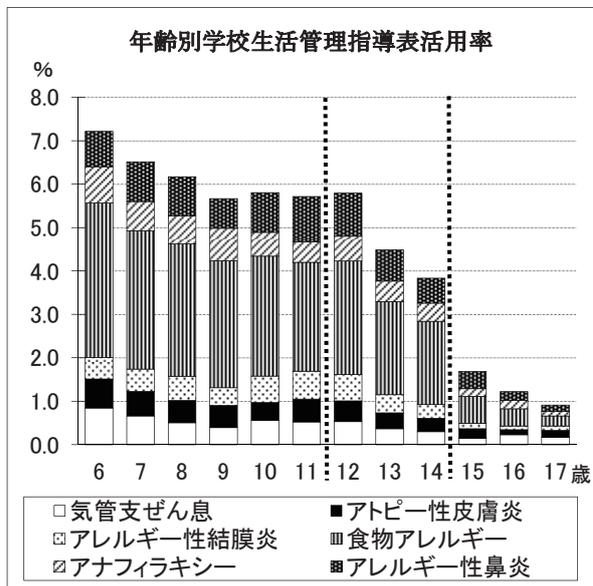


○学校生活管理指導表の活用は

「食物アレルギー」が多い傾向

学校生活管理指導表の活用率は、「食物アレルギー」による活用率が、他のアレルギー疾患に比べて高い。

アトピー性皮膚炎においては、小学校、中学校で管理表の活用率が高い傾向がみられる。

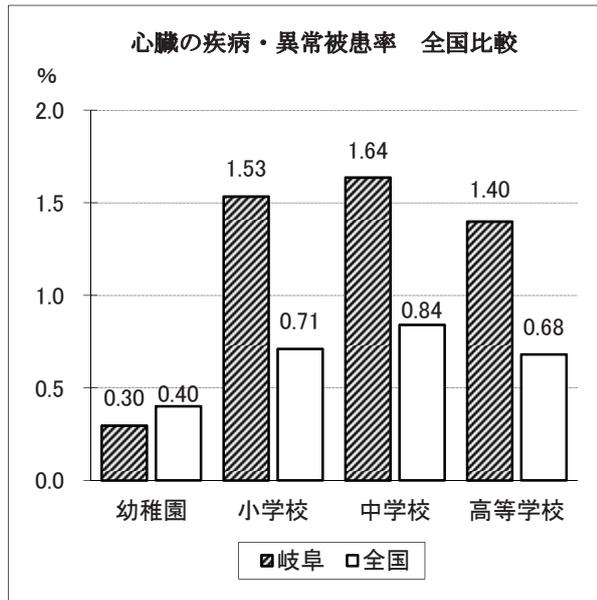


(9) 心臓疾患・心電図異常

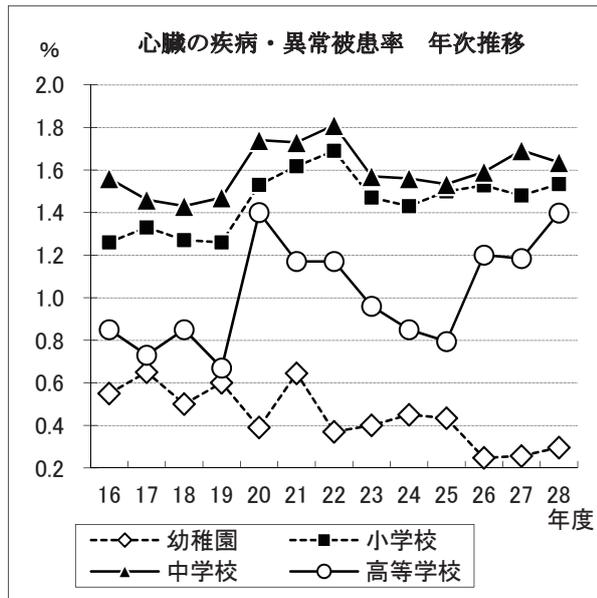
- ①心臓疾患・・・心膜炎、心包炎、心内膜炎、弁膜症、狭心症、心臓肥大、その他の心臓の疾病・異常の者。(心音不順、心雑音及び心電図異常のみの者は含まない。)

平成 28 年度の「心臓疾患」の割合は、全国と比較して、小学校、中学校、高等学校で被患者率が高

値である。前年度と比較すると、高等学校において、0.22ポイントの増加（H27:1.18%）がある。

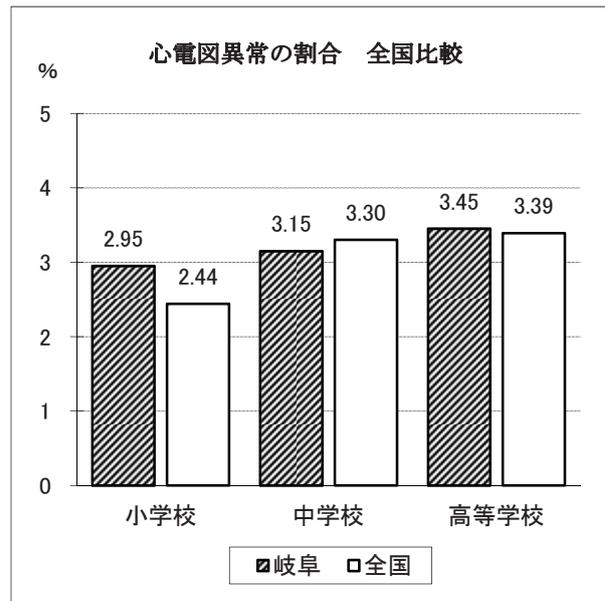


毎年、「心臓疾患」の被患率の変動がみられるが、校種を比較すると中学校が多い傾向にある。



②心電図異常・・・心電図検査の結果、異常と判定された者。ここでいう異常とは医師が心電図所見を見て異常と判断した者を指す。（一次検診）

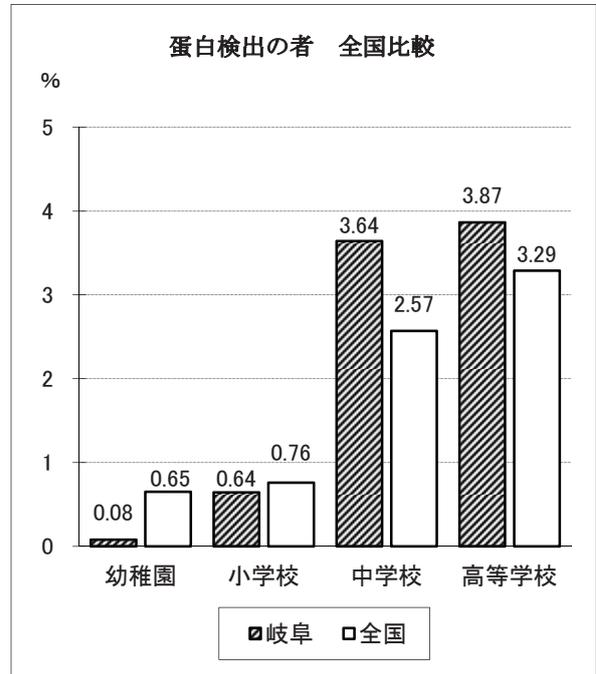
心電図異常の割合は、ほぼ全国平均並みである。昨年度の結果、小学校2.98%、中学校3.12%、高等学校3.07%と比較すると、中学校と高等学校で割合が増えている。平成28年度から中学校において心電図12誘導による検査を導入し、結果は0.03ポイントの増加であった。



(10) 腎臓疾患

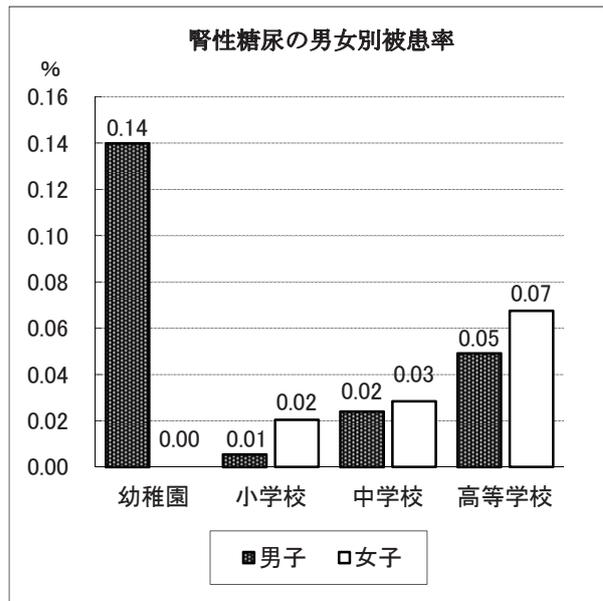
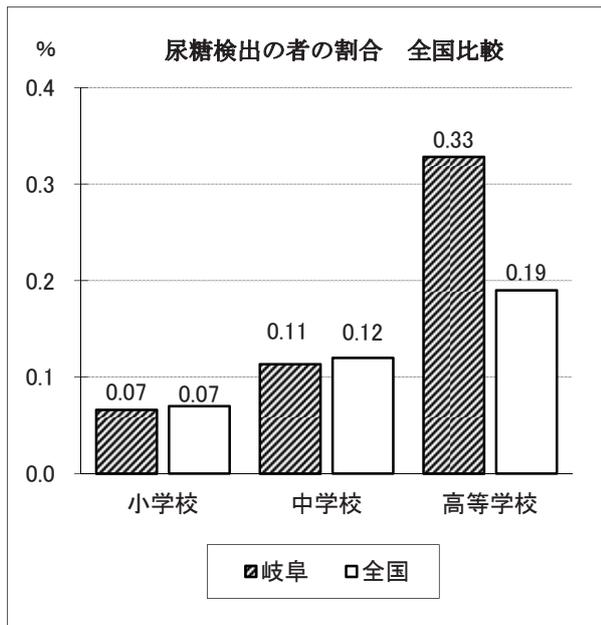
①蛋白検出者・・・第1次検査の結果、尿中に蛋白が検出（陽性又は疑陽性と判定）

蛋白検出者は、中学校3.64%、高等学校3.87%と、中学校・高等学校で減少したが、全国平均を大きく上回っている。



②尿糖検出者・・・第一次検査の結果、尿中に糖が検出（陽性と判定）された者。

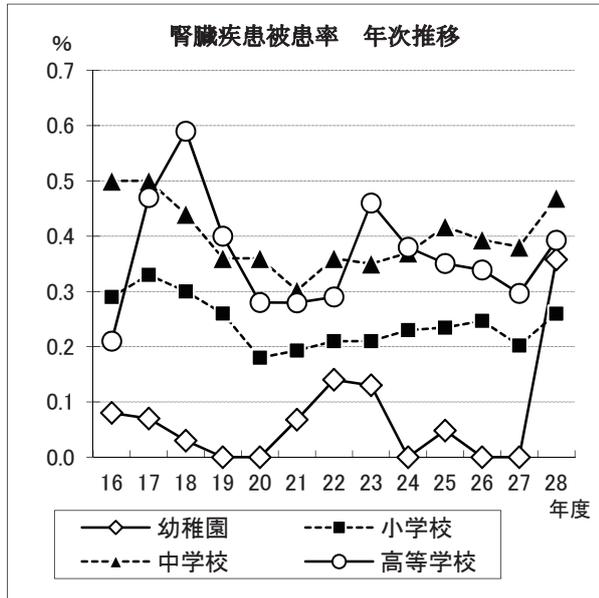
「尿糖検出者」は、中学校で0.11%と昨年の0.18%から減少したが、高等学校では、昨年の0.24%から0.33%と増加した。



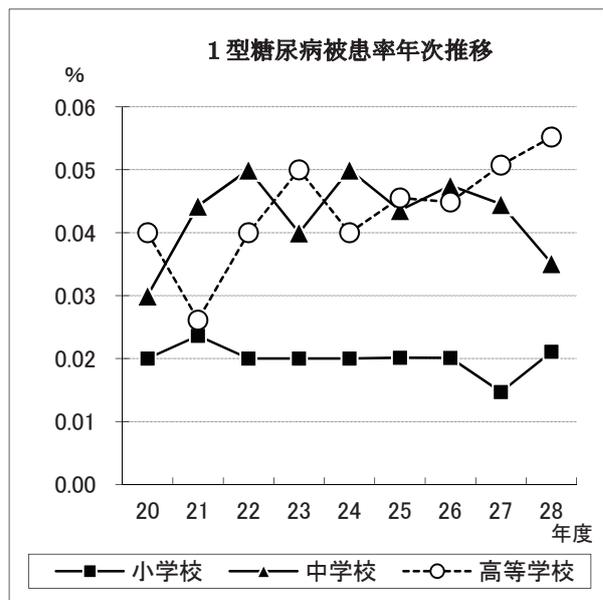
③腎臓疾患・・・急性及び慢性腎炎、ネフローゼと判定された者

「腎臓疾患」においては、全ての校種で昨年度より増加した。幼稚園の増加が著しいが、対象者が1,356人と少ないため、数人の出現で高値を示していると思われる。

⑤1型糖尿病・・・膵臓のインスリンを生成している細胞が破壊され、インスリン分泌が著しく低下しておこる病気
 2型糖尿病・・・2型糖尿病になりやすい素因を持っている子どもが、運動不足、過剰な食事やストレスが多い生活を続けていると発症しやすい病気

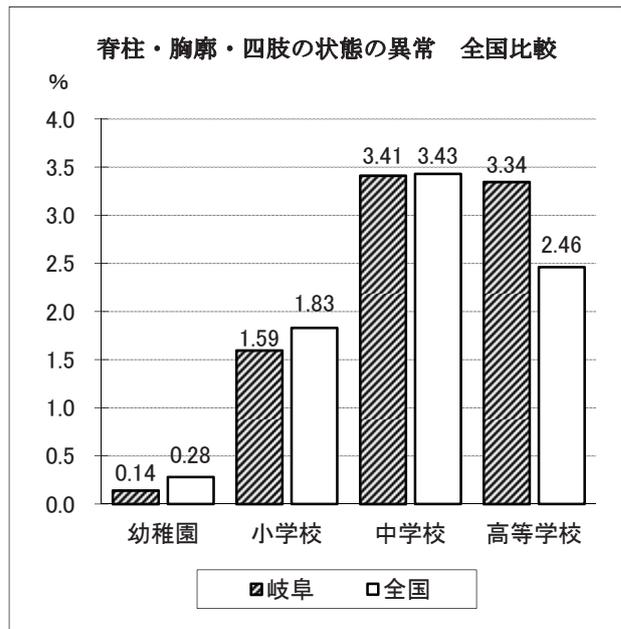
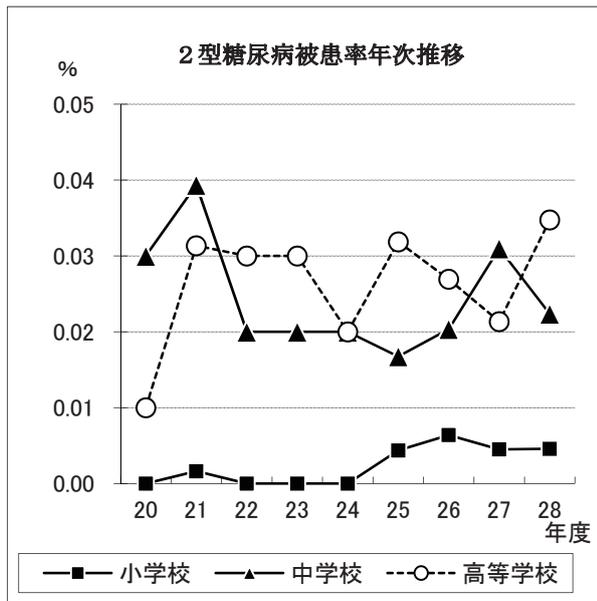


岐阜県独自の調査項目である「1型糖尿病」「2型糖尿病」の被患率年次推移を見ると、高等学校でわずかに増え、中学校でわずかに少なくなっている。



④腎性糖尿・・・腎性糖尿と判定された者

小学校、中学校、高等学校では、全国より下回っているが、幼稚園では男子で高値を示した。

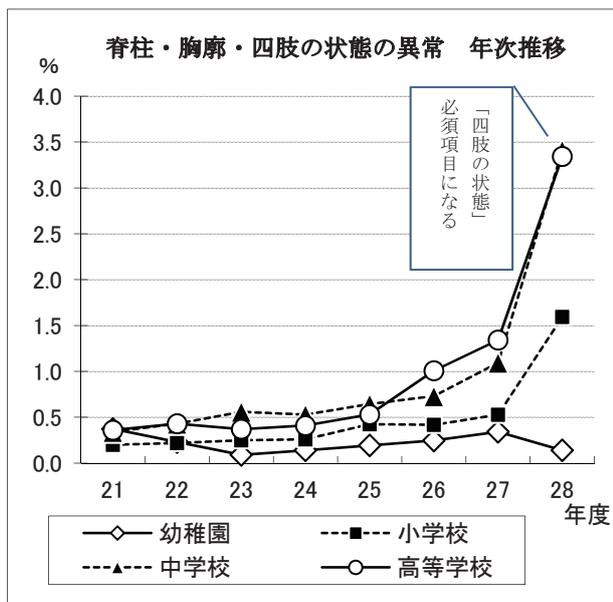


(11) 脊柱・胸郭・四肢の状態の異常 ○全国的にも 著しく増加する傾向

脊柱・胸郭・・・脊柱、胸郭及び四肢の状態が異常と判定
四肢の状態 された者

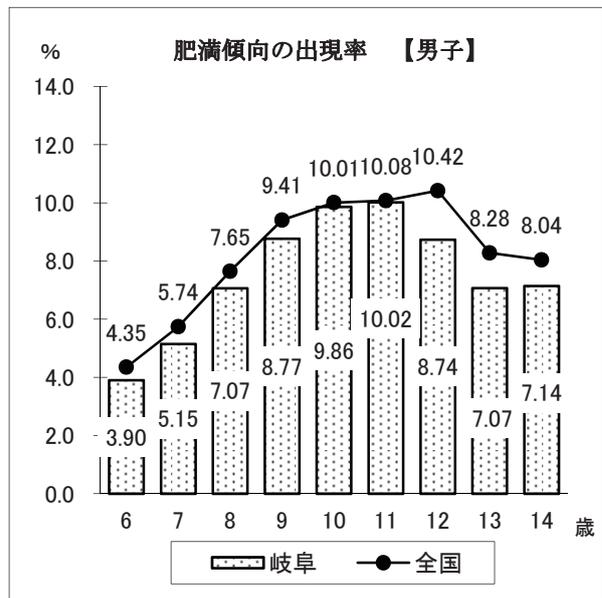
本年度より健康診断の項目「四肢の状態」が必須項目に加わり、いわゆる運動器検診が実地されている。その結果、昨年度より小学校1.06ポイント、中学校2.32ポイント、高等学校2.00ポイントと大きく増加をしている。

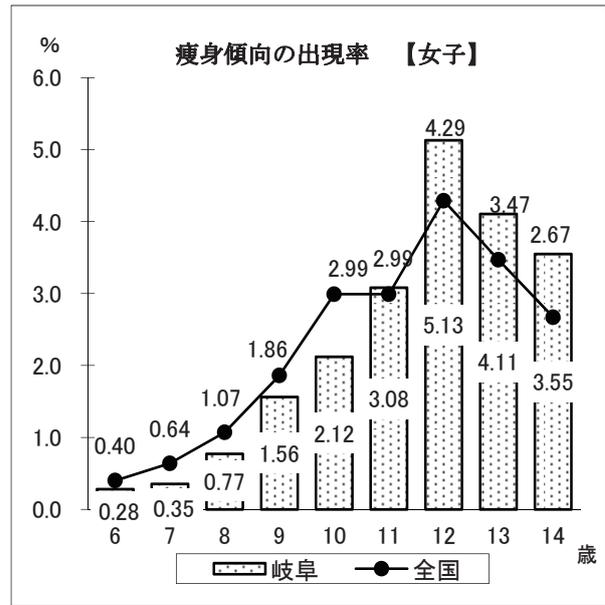
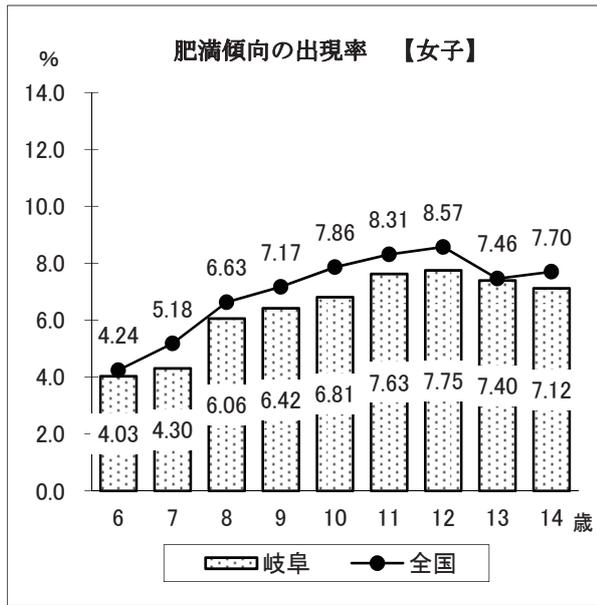
全国的にも同様な傾向を示している。



(12) 肥満傾向

肥満傾向の出現率は、全ての男女学齢において、全国を下回っている。そして、男子の12～14歳で大きく下回っている。

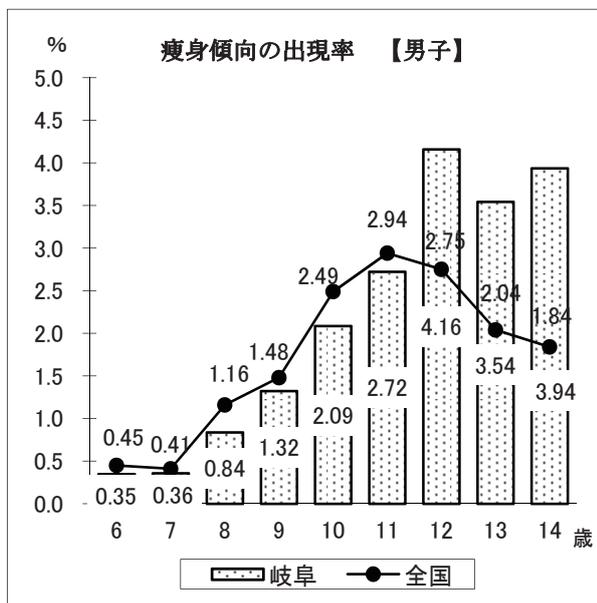
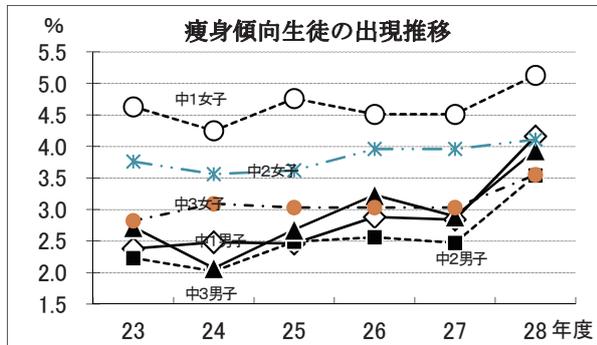




(13) 痩身傾向

○ 痩せ傾向やや強まる傾向

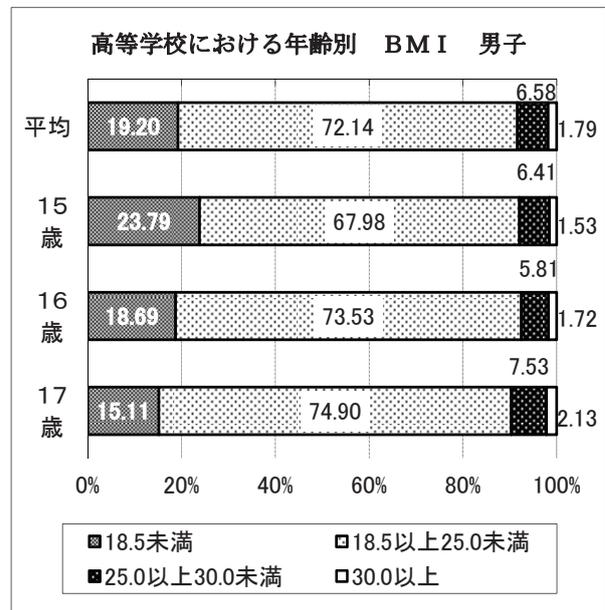
痩身傾向の出現率は、12~14歳で全国を上回っている。特に男子に痩身傾向が顕著にみられ、前年度値(12歳2.84%、13歳2.47%、14歳2.89%)と比べても痩身傾向が強まっている。

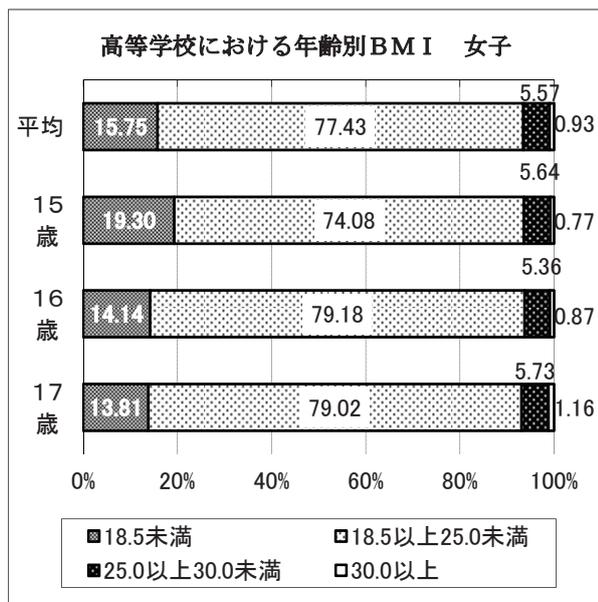


(14) 高等学校のBMI

BMI・・・成人の肥満並びに痩せの評価方法のひとつ
 $\text{体重kg} / (\text{身長m})^2$

高校生に対して、BMIを指標として肥満及び痩身傾向を算出している。男女ともに、BMI 18.5未満の割合が高い傾向である。特に、男子17歳において、昨年度値の13.46%からの増加率が大きい。





(15) その他

県内の「その他の疾病・異常」の被患率が増加傾向にあることから、平成25年度よりその他の疾病調査を行っている。

その他に含まれる最も多い疾病・異常は、発達障がい（自閉症スペクトラム障がい等）である。「その他の疾病・異常」中で占める割合は、小学校56.48%

（H27:54.15%）、中学校30.28%（H27:28.64%）、高等学校5.83%（H27:6.91%）。次に多い疾病・異常は、てんかん（熱性けいれん含）であり、小学校8.58%（H27:10.69%）、中学校13.67%（H27:15.68%）、高等学校12.39%（H27:11.85%）であった。

低身長等（内分泌・栄養及び代謝疾患を含む）の疾病・異常の割合は、小学校で、7.27%、中学校10.72%、高等学校14.82%であった。